

「大学教育改革と地域・高校生へのメッセージ」

— 文系の立場から —

人文学部 鈴木佳秀

はじめに

与えられた時間は限られているので、「文系の立場から」求められていることを簡潔に述べさせていただきます。

まずはじめに、大学教育改革をめぐる論議に、「科学技術創造立国」という我が国の国策が前提されていることに疑問を呈しておきたい。文系の立場から、人文社会科学系の学問分野に携わっている者から見れば、我が国がこれを国策として掲げていることじたいが恥ずかしいことである。先進国で、このようなことを生真面目に国策として掲げている国はまずない。大学審議会の方々がこのようなスローガンに疑問を持たないことじたいが驚きであり、理解に苦しむ。これでは、日本が文化的に後進国だと言われてもしかたがないだろう。

このような科学技術一辺倒のような政策を国策として掲げていることじたいが、大学教育改革そのものを歪める可能性がある、と感じている。実利至上主義によって大学改革を進めることへの危惧を覚えるからである。日常生活で役に立たないからという理屈で人文社会科学系の学問を過小評価することから、人間性を省みない教育が生まれてくるのではないだろうか。確かに科学技術は必要だが、人間の精神や思想、文化の重要性を忘れてるように思えてならないからである。しかもそれが、教養教育の軽視とは無縁ではないと考えられる。大学教育改革の論議を耳にしても、あるいは答申の中間まとめを読んでも、いわゆるオーム事件の教訓は何一つ活かされてないと言わざるを得ない。それが率直な印象であり、危惧を覚える次第である。

一、自然科学系分野における飛び級について

ワークショップで紹介されているC大学での取り組みについては、手元に届けられた資料から判断する限りではあるが（その意味で、コメントをした筆者の理解に限界があることを承知の上で）、教養教育についての取り組み方について、ある種の問題性を感じる。

C大学での取り組みによれば、入学後の一年次では物理や数学の基礎教育を重視しているという。誤解を恐れずに言えば、特別な才能を持つ飛び級入学生には、その得意とする分野以外の領域での基礎知識（基礎学力）に欠けているため、補いの教育が必要であることを認めているのである。自然科学系の学問は積み重ねで成り立つため、基礎教育という形での補習授業を必須とせざるを得ないはずである。そしてそれは当然ながら、飛び級で入学した直後から、受け入れた側が当該学生に対して配慮しなければならない事柄であろう。

他方で、そのような補習授業の必要から見て、当該学生にとって教養科目の選択の幅が著しく制限されることになるのは必定である。例えば本学の教養教育の現状から見れば、人文科学、社会科学、外国語また保健体育などの科目を選択する際に指定時間枠があり、張り付けの授業が多いため、当該学生が一年次から、自由に様々な科目を選択して（人文社会科学系の科目を取らせるとは言うものの）、基礎教育の不足部分を補う、というのはまず無理である。C大学の場合はどうであろうか。

教養教育についての問題は軽く触れられているのに比べ、C大学の資料の中で紹介されている未来像は、極めてユートピア的なものに近い。飛び

級入学によって英才教育を受けた当該学生が留学して学位を取り、海外の大学で教鞭を執り、国際学会で活躍するというイメージは、確かに高校生には魅力あるものに違いない。だが、多少とも海外における大学の教育事情や研究機関に触れたものであれば、それがいかに現実味に乏しい将来像を提示しているかは明らかで、本当にそれでいいのかという印象を受ける。

また、基礎理念として掲げている「幅広く深い教養」「総合的な判断」「豊かな人間性」という言葉に裏打ちされた教養教育の実態が見えてこないのも、大いに気になるところである。飛び級で入学してくる学生が、一年次から語学教育や補習という基礎教育に明け暮れることは、誰しも容易に想像できるからである。これは本校やC大学に限ったことではないだろう。

懸念はそれだけではない。特別な能力を持つ学生を特別選抜のようにして入学させることは、本人の希望に応える道ではあっても、偏った人間教育をもたらすいわば危険な実験とならない保証は何もない。偏った人間教育で才能を伸ばした人物が、海外の大学で責任ある地位について活躍するなどということは、よほどの幸運に恵まれた人を除いて、ほぼあり得ないと言ってよいだろう。責任ある人材を求める点で、我が国であっても海外の教育機関であっても、研究者に課せられた状況は同じだからである。

飛び級が自然科学系の学問分野において歓迎され、制度的に飛び級を導入しようとする計画は、おそらく特異な才能を伸ばす英才教育を若いうちから実施したいという思惑から出たものであろう。それはそれで理解できる。だが他方で、それは果たして基礎教育あるいは教養教育を重視することと両立するのかどうか、という疑問がわく。「豊かな人間性」を培い、「総合的な判断」を身につけさせるようなバランスのとれた教育を考えれば考えるほど、英才教育はユートピア的に響く。教養教育を担当した経験がある者であれば、両立が決して容易でないことくらいすぐにわかるはずである。

(C大学の資料にうたわれている文言を見る限りではあるが) 当該学生に対して、教養教育を具体的に、またどの程度の範囲で推進するのかがいまひとつ見えてこない。本学における教養教育の現状から類推しても、それを越えるような実施体制があるとは思えない。

むしろC大学工学部の「実験」で有効性があるとすれば、自然科学系の学問分野では学部から大学院博士課程まで見事に整序された一貫教育体制があること、また十分かつ必要な教養教育を担当する人材と時間が許されている場合に限られるだろう。飛び級入学を導入するには、制度的にこうした体制を整えておくことが大前提と思われる。

しかしながら、このような体制が確立されたところで、飛び級入学を導入した英才教育がそのまま人文社会科学系の学問分野に適合するかどうかは、はなはだ疑問である。個人的には、自然科学系の学部が学部として飛び級入学を導入することに必ずしも反対するものではない。だが、教養教育のしわ寄せが、もし飛び級入学を導入しない他学部及び、今以上の負担を強いるようなことは是非とも避けていただきたい。願わくは、教養教育に対する手当を講じた上で、飛び級入学を採用していただきたい。

蛇足になるが、高校からの飛び級が、英才教育の必要から特異な才能を持つ学生を率先させて入学させ、いち早く最先端の学問に触れさせたいという意図は理解できるが、それが高校教育への蔑視につながるように留意していただきたい。飛び級入試を導入するにせよ、高校の現場で基礎教育に携わっている教師との共同の研究や共同の検討を積み重ねた上で、実施するようにお願いしたい。

二、人文社会科学系での飛び級について

さて、人文社会科学系の学問分野から見れば、文系の学部で飛び級入学を実施する意義はほとんどないだろう。大学で学ぶことは、自然科学系の学問と同じように知識の積み重ねという側面はあ

るにはあるが（例えば司法試験を受けるような学生には）、人文社会科学系の分野では何よりも思考の訓練を重視するからである。自分の思想や考え方をさまざまな学問体系との折衝を通じて練り上げ、自立した精神を育てるのがわれわれの責務であると考えている。

人文社会科学系で飛び級入学が無意味であるのは、帰国子女を例に取ってみればよくわかるであろう。彼ら帰国子女は、その大多数が国際的な感覚を身につけて、国内で教育を受けた学生よりも遙かに優れた外国語能力を培って帰国し、日本の大学に入学してくる。その点で言えば、彼らも英才教育を受けるに値する学生かもしれない。では、彼らの能力に見合った形で飛び級入学を認めるべきであろうか。高度の外国語の能力に長けた帰国子女の場合ですら、飛び級入学は無意味であると思われる。

外国語による日常生活上のコミュニケーションは優れていても、それがそのまま学問的な適性につながることはまずないからである。彼らには外国語活用能力とは別の思考の訓練が必要なのである。たとえドイツ語が堪能であっても、すぐに哲学書が（論の構造を理解した上で）読める保証はないし、ドイツ語で書かれた論文を消化できるとは限らないのである。ドイツ語の会話能力に優れていても、批判的に文献を読む能力や、物事の構造を把握する能力とは必ずしも一致しないし、むしろそれはコミュニケーションの能力とは別の能力である。

こうした学生には、同世代の友人の輪の中で、あるいは教師や地域住民や家族との人格的な交流の中で薫陶を受ける経験の方が重要であり、基礎教育の上でも人間的な成長のためにも、高校における三年間は欠くことのできない期間だと言わざるを得ない。それを突き破る形で、大学に飛び級入学する必然性は感じられないのである。

これは外国語の才能だけに限ることではない。たとえば法学あるいは経済学の分野に関係する天才であっても、飛び級入学で受け入れる余地はないと考えている。高校在学中に司法試験に合格する

ような学生であっても、高校生活をきちんと終わてくることの方がむしろ望ましいと考える。大学受験資格を得てくる学生の場合も、事情は同じである。繰り返しになるが、思考訓練を重視する人文社会科学系の学問分野から見て、いわゆる文系での飛び級入学に意義があるとは思えないのである。

人文社会科学系の立場から言えば、飛び級入学よりも、大学に入学し教養教育を受ける中で、優れた学生には飛び級あるいは飛び級で大学院へ入学できる道を用意する方が、より現実的である。必ずしも同列において比較はできないが、同じことはほぼ自然科学系の学問分野にも言えるのではないか。

人文社会科学系の学問分野にいる者として私見を言わせていただけるならば、教養教育が大学における生命線であると主張したい。専門教育といっても、それは一般教養から切り離されたものではあり得ず、現実には即して言えば、学部教育は専門性を伴った教養教育ではないかと考えている（Liberal Arts）。真の意味での専門教育は、大学院の前期・後期の一貫教育が可能な場合に初めて実のあるものとなりうるのではないか。その場合ですら、しっかりとした教養教育がなされていてこそ、いわゆる専門教育が有効に機能すると思われる。

おわりに 文系の担当者から高校生へのメッセージ

今回のワークショップには、高校生へのメッセージも主題の中に含まれているので、幾つか希望を述べることを許していただきたい。

まず第一に高校生に希望したいことは、主としてどんなことに興味があり、何について学びたいかをよく考えた上で受験してほしいことである。特に第二外国語、未習外国語の選択に際し、注意を促しておきたい。将来学びたい分野ややりたいことがあいまいなまま、入学時に未習外国語を選択する傾向が強いからである。

どうか自分がやりたい分野や興味のある分野について十分な情報を得てきて欲しい。そのため、大学としても高校生に積極的に情報を提供する姿勢があってしかるべきである。大学側の責任において、どのような外国語が必要であるのか、どの外国語が大学で学べるかについて、用意周到なガイダンス資料を作成し、それを学部案内に盛り込むことが望まれる。

最後になるが、この場で「文系の立場から」個人的な要望を言わせていただけるならば、是非、世界史か日本史を学習してきてほしい。英語を一生懸命に学んできてほしいが、どうか国語を軽視

しないで、読解力や文章による表現力を養ってきてほしい。例えば、文学書を乱読しているような学生に、是非とも入学してきたもらいたいと願っている次第である。

(付記：本稿は、平成 10 年 7 月 24 日開催の大学教育開発研究センターによるワークショップ当日に用意したメモを土台にしつつそれに手を加え、質疑応答の際にお話しした部分を補って作成したものである。出席者のお許しを願う次第である。)